



Title	Girolamo Paraboscoの『気晴らし(I Diporti)』の輪郭
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 1991, 5, p. 131-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79536
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Girolamo Parabosco の『気晴らし(I Diporti)』の輪郭

米 山 喜 晟

第一章 作者の位置

E.Malatoによると、16世紀から17世紀にかけてイタリア・ノヴェッラは「極端に豊かで多様な生産性を発揮している¹⁾」。いわばそのノヴェッラ・ブームの火付け役を果たした地方は、当然『イル・ノヴェッリーノ』と『デカメロン』によって確固たる地歩を築いて来た後、この時代にも A.G.Firenzuola や A.Grazzini 等の優れた作者を生んだトスカーナだったが、「しかしおよそ16世紀の半ばから17世紀の半ば過ぎまでの間、G.F.Straparola、S.Erizzo、G.B.Giraldi Cinzio (ママ)、Celio Malespini、Francesco Pona、Loredano e Brusoni、Sagredo、gli Accademici Incogniti、Maiolino Bisaccioni その他多数によって、イタリア・ノヴェッラ文学界の全貌の中でとりわけ中心的な地位を占めているのは、ヴェネトなのである²⁾」とされている。美術史と同様ノヴェッラ史においても、中心はフィレンツェからヴェネツィアに移動したのである。本論において紹介する『気晴らし』の作者も、生まれは1524年ごろのピアチェンツァで、A.Willaert に音楽を学び各地の宮廷で活躍したが、特に1551年以後はヴェネツィアのサン・マルコ教会のカッペッラ・ドゥッカラーレの首席オルガン奏者³⁾ だったとされているので、このヴェネト・グループの一人だと見なし得る。先の引用に彼の名が見当たらないので、Malato は彼をヴェネトの代表的作者とは評価していないようだが、『気晴らし』⁴⁾ という作品は Erizzo の『六日間(Le Sei Giornate)』⁵⁾ と共に早くからラテルツァ社の「イタリア作家叢書」の一巻に収められていたため、結構知名度が高く比較的良好に読まれているノヴェッラ集なのである。作者は1557年30才代半ばの若さで死んだにもかかわらず、他に多くの抒情詩、長詩や7篇の喜劇と1篇の悲劇等を残した「多作家(poligrafo)」である。勿論作曲もしていて、幾つかの声楽曲が残っているそうである。いずれの分野でも凡庸な音楽家兼文学者だったらしい。本作品でも全てに伝統的ノヴェッラの模倣の影が濃厚である。だがある時代の文化の特性は、むしろこうした凡庸人の作品にこそ反映しているし、筆者の感想では作品自体も、その大半が Valerio Massimo 等古典のエピソードの翻案から成り立っている Erizzo の作品集に比較した場合、道德臭さが少ない分だけ、まだしもこちらの方が興味が持てるのではないかと感じられる。この作品が、恐らく1550年に初版が出た後早くも1552年に同じ出版社(Venezia, Gio. Griffio)から再版され、さらに作者の死後1558年と1564年に、やはりヴェネツィアにおいて別の出版社から重ねて刊行された

という事実⁶⁾は、同時代人に歓迎された証拠だと見なし得る。多くの民話を含むことで名高い Straparola の作品が、1550年以来ばらばらに(separatamente)刊行され始め、1553年に完成して大好評を得たこと⁷⁾、他方 Erizzo の『六日間』が1554年のすぐ後でまとめられたものの刊行されたのはようやく1567年だとされていること⁸⁾や、シェイクスピアの『オセロ』等の原作を含んでいるために、Straparola と並ぶヴェネト・グループ中で最も重要な作者だと見なし得る Giraldi Cinthio の『百物語(Gli Hecatommiti)』の刊行が1565年であること⁹⁾等から考えると、本作品こそヴェネツィアにおけるノヴェッラ・ブームの口火を切ったものだという文学史的意義を認めねばなるまい。特に重要なことは、この作品が『デカメロン』風の額縁を持っているという事実で、すでに筆者は他の場所で、この時代における印刷業の繁栄が『デカメロン』風の額縁に新しい価値をもたらしてその大流行を生んだことを指摘した¹⁰⁾が、この作品こそまさにイタリアの印刷業界の中心であるヴェネツィアにおいて、そうした試みのモデルとしての役割を果たした作品だと言えるのである。だから個々の作品の質そのものは今述べた他の作品集に一步譲らねばならないとしても、作者 Parabosco が時代の必要を逸早く察知して、先例を示した勤の良さと功績とを評価すべきなのである。

第二章 『気晴らし』の構成

すでに述べたとおり、この作品には『デカメロン』型の額縁がついているが、それ以外にも様々な要素を含んでいて、それ程大作でないにもかかわらず、その構成は決して単純なものではない。以下でそうした諸要素を列挙しながら、この作品の額縁の特性を眺めておきたい。

筆者はかつてノヴェッラをまとめている部分を「枠組」と総称し、序文や献辞等の部分を「外枠」、語り手が登場して多少とも劇的要素を持つ部分を「額縁」とよんで区別した。¹⁾ 序文しか持たない『イル・ノヴェリーノ』や Sacchetti の『三百話』から献辞の部分がほとんど額縁に近い程発達した Masuccio や Bandello 等の作品に至るまで、外枠のみでまとめられているノヴェッラ集も決して稀ではないが、多くは何らかの額縁によってまとめられている。その内でたとえば『七賢人の書』や『ロ・クント・デ・リ・クンティ』のように額縁自体が一篇の物語として展開される狭義の入子箱型のもの（仮にアラビアン・ナイト型額縁と呼ぶ）と、単にノヴェッラ群をまとめるために設定された物語性の乏しいもの（仮にデカメロン型額縁と呼ぶ）との間には差異があるが、イタリア・中世およびルネサンス期のノヴェッラ集にはほとんど前者は見出せない²⁾。実は後者にもいろいろなタイプがあって、例えば語り手の数で分類すると、きまった数の登場人物が交互に何度も物語を語る純粹のデカメロン型（他と区別するため『六日間』の作者の名を借りてエリッツォ型と呼ぶ）の他に、単独の語り手が語り続けるセルカンビ型、逆にその場に居合わせた（途中で参加することもある）多数の人々が各自一度ずつ語るアリエンティ型³⁾の三種に分類出来る。この作品は後に見るとおり、大勢の人が交互に語っているのでアリエンティ

型に属している。

この作品の場合、その枠組はまず外枠として2つの献辞を有している。すなわち il conte Bonifacio Bevilacqua への献辞と il signor Marcantonio Moro への献辞がそれである。作者は後の献辞で、「最初の献辞の相手が本書を受け取らぬうちに亡くなられたので、本書をこの上なく敬愛する貴下に捧げます」⁴⁾と正直に記している。

続いて額縁の部分に入るが、それは以下のような設定と人物によって成り立っている。

ヴェネツィアの紳士たちが仲間を作って気晴らしに出掛ける場所のひとつに、「ヴァッレ (谷)」と呼ばれる魚を飼っている生け簀がある。ヴェネツィアの貴族、messer Girolamo Molino 以下9人とボローニャ人2人および二大文人 Speron Speroni と Pietro Aretino、それに作者 Girolamo Parabosco を含む他の都市の出身者7人の総数18人が、最近のある朝、2～3日気晴らしするため、そうしたヴァッレの一つへ魚釣りに出掛けたところ、嵐のため水面が荒れたため大きな掘立て小屋に避難した。下男らが食事の準備をするのを待つ間、Alessandro 伯が、「女がいなくて良かった⁵⁾」と呟いたため、それを聞き咎めた Benedetto Cornaro が確認した結果、女性を罵る伯に対して皆が様々な意見を述べ、文人 Ruscelli の女性賛美をこきおろす伯と他の人々との議論が繰り広げられる。結局 Zorzi が間に入って別の論議に移ることにする。食卓につくと嵐はますます強まって来たので、Badovaro がせっかく面白い顔触れが揃ったのだから、何か楽しいおしゃべりをして過ごそうと提案して、全員の賛同を得る。いろいろ提案されたが結局交互にノヴェッラを語ることに落ち着いた。最初の語り手に選ばれたのは、messer Lorenzo Contarino で、Spira が「あなたが選ばれたのは、後の者があなたに近付くため努力するためです。あなたは話し終った時次の語り手を指名して下さい⁶⁾」とすすめる。こうして3日間にわたるノヴェッラの集いが開始された。

第一話 (付録参照) が終わると、Carlo を死に導いたのは新しい恋人への愛か、前の恋人への憎悪かという疑問が出され、議論が紛糾。決着がつかないまま、次の語り手が指名されて語り始める。以下第九話まで語られた時、晚餐が用意されて第1日目が終わる。

第2日目の朝、漁師たちは起き始め、紳士たちは急いで食事を取るが、まだ悪天候が続いていて船が出せない。そこで前日最後に当たった Vitturi が、前日に続いてノヴェッラを語り合おうと提案、Badovaro を指名して物語が始まった。以下次々と第十六話まで語られた時、キオッジャの帆船が到着したというニュースが伝わり、やがてキオッジャで遊んで来た4人の紳士が到着し、彼らも悪天候のため仲間に加わる。ノヴェッラの会は中断されて、食事が終わるまで四方山話が語られたが、食事の後で Vitturi が Alessandro 伯の女性否定論を新入りの4人に紹介した後娯楽のために討論をしようと提案して、Molino に4つの問題(questione)を出すよう依頼し、以下でそれらの問題をめぐっての討論が行われる。

第1問題 女性の男性に対する愛と、男性の女性に対する愛はいずれがより激しいか。

第2問題 あることを享楽している人と、それを望んでいる人とでは、どちらがより幸福か。

第3問題 一度手に入れた女性を失うのと、望んでも得られないのとでは、どちらが辛いのか。

第4問題 恋は運命によるものか、それとも選択によるものか。

これらの討論とそれについての感想が終わると、人々は眠りについた。

第3日目の夜が明けると天気が良かったが、大半の紳士たちはそのまま小屋に残って談話に興じることにする。2人の伯爵 il conte Alessandro Lambertino と il conte Ercole Bevilacqua はいずれも外地人で、ヴェネツィアに住んだことも少ないため、漁師とともに魚を取りに出掛けてしまうが、Corso が指名されて残った人々にノヴェッラを語り始めた。

Corso はそのノヴェッラの中である motto の来歴を説明したが、それについて Zorzi が motto と呼ぶべきか、proverbio (ことわざ) と呼ぶべきか分からないと疑問を發し、そのことから人々は motto に関する談議を展開した。Badovaro によると、motto には驚かす効果と確認する効果があるとされ、Mulla は motto は防御に使うと特に効果的だとして、若い娘が彼の友人の頭にメロンの皮を投げ付けて、その友人から注意された時「私は豚にやったのに」と言ったので、友人が「雌牛だって、そのおかげで肥ってきれいになるんだよ」と皮肉った例⁷⁾を挙げる。以下pp.163~177は実例を多く収録して、P.Bracciolini の『冗談集』に近付く⁸⁾。

Speroni がそんな風に対話が活気づいたのを見て、思い付きと機知を伴う詩形であるマドリガーレの出番だと判断し、マドリガーレ [バラボスコの作品らしい] を披露、以下で3行連句の詩形カピートロや、当時極めて流行していたカンツォーネ・パストラーレ [牧人風のカンツォーネ] が披露される。いずれも内容は女性の美しさを讃え、その非情さを嘆くというペトラルカ風のテーマである。

やがて話題はヴェネツィアの紳士たちの美德 [valore=勇気]、善良さ、賢さの賛美に移り、ヴェネツィア共和国は世界最大の奇跡の一つだと称えられ、ボローニャ出身の Bentivoglio がヴェネツィアの女性は男性に劣らず立派だとして、madonna Andriana Cornara 以下実在の女性たちの実名を列挙して賞賛し始める。Susio、Pietro Aretino 等同じく外地人が続いてヴェネツィア美人を賞賛する。それに答えてヴェネツィア人たちが交代でまずフェルラーラの美人を褒め、続いてボローニャの美人を褒め、Speroni の娘の名前をも含めてバドヴァ美人を賞賛した。更にアンコーナの美人とピアチェンツァ美人を褒め、続いて美人は無数にいるがこれこそ自然(natura)が芸術(arte)に勝っている証拠だと主張される。アレツォとヴィテルボの事情に詳しい人が求められると、Molino が適当な人はいないけれど、Pietro Aretino と Spira という2人の才人の故郷だということから、どんなに美人が多いか分かると説く。その理由は、2人によってそれらの都市の女性たちの理知(intelletto)と知恵(sapienza)の水準が分かる上に、「自然は大概自分が最も気に入る魂を、最も美しい衣の中に置くことを好むのだから⁹⁾」[健全なる精神は健全なる肉体に宿る、に似たルネサンス的調和主義と見なし得る台詞]と説明する。Aretino は「この人たちの賛辞にはルビーやエメラルドの重みがある」と喜び、お開きとなる。その後伯爵たちが釣りから戻って来たので、一同はボートでヴェネツィア中心部へと帰国した。

第三章 作品の舞台設定と登場人物の階層

わずか17篇から成り立っているノヴェッラ集ではあるが、従来筆者がノヴェッラの分析に用いて来た視点からその舞台設定と登場人物の階層を概括することによって、この作品の特性を眺めておくことにしたい。

まず舞台設定のために選ばれた時代を眺めると、まず注目されるのは、この点に関する記述が極めて簡潔である。その記述は大別すると次の4種に分類できる。

- I. non ha gran tempo (「それ程以前のことでないが」) に類した表現。(gran tempoの部分が tanti anni や molti mesi の場合もあるが、ややニュアンスは異なるものは「近年」とみなし得る。I. II. IV. XVI. XVII. の5話 (29.4%)
- II. giàで表現されているもの。(Xに già molti anni ha「すでに多くの歳月が過ぎた昔」、XIに14世紀半のミラノの領主 Giovanni Visconti が登場、XVIに「当時は今と違っていた」という主旨の文が見られるのを除くと、他のノヴェッラでは時代に関するヒントはこの一言で片付けられている) III、V、VII、VIII、IX、X、XI、XII、XIVの9話。(52.9%)
- III. 「貴族たちがナポリを支配して党争が激化していたころ」と説明。XIIIの1話 (5.9%)
- IV. 全然記述なし。VI、XVの2話 (11.8%)

このように時間に関する記述が少ないからといって、必ずしも作者の時間の感覚が希薄だとは決していえない。むしろ近代人に近い時間感覚が発達していて、ノヴェッラの舞台に歴史的時間が馴染み難いことを自覚していたが故に、こうした簡潔な記述に止めたと見なした方が正しい。

「かつて」というのは曖昧だが、一応現在と断絶している時代と見なして差し支えなく、「ナポリ云々」もほぼそれに準じるのに対し、「近年」や記述のない場合は現在とつながりのある時代とみなし得るであろう。だからIIとIII (58.8%) とが今日のイタリア語文法の遠過去形の時制に対応するのに対して、IとIV (41.2%) (勿論多少のずれはあるが) 近過去形の時制と対応している。こうした論理的分析が可能である以上、この作品の作者はセルカンビ¹⁾等とは対蹠的に近代的な時間と歴史の感覚を持っていたと見なし得る。

単独の舞台となる都市

ヴェネト地方、ヴェネツィア、トレヴィーゾ、パドヴァ各1。(17.6%)

ロンバルディーア地方 ミラノ、ピアチェンツァ、ブレッシェ、アレクサンドリア各1。(23.5%)

エミリア・ロマーニャ地方 パルマ2、レッジョ、ボローニャ各1。(23.5%)

リグーリア地方 ジェノヴァ1。(5.9%) 以下同じ。

ピエモンテ地方 モンフェルラート1。

トスカーナ地方 アレッツォ1。

スペイン ヴァレンシア1。

複数の舞台となる都市

ファマゴスタ (キプロス) - カンディア島 - ジェノヴァ - ミラノ 1

ナポリーコンスタンティノーブルーヴェネツィア 1

以上の数字から分かることは、舞台が北イタリアの3地方の諸都市にあまりかたよることなく分散しているという事実である。作者の生まれたロンバルディーア地方も、作品の額縁となったヴェネツィアも特に重要だというわけではなく、また地中海世界もたしかに出て来るものの、特に大きな比重を占めているというわけではない。一応その語り手の多数はヴェネツィア人とされているにもかかわらず、舞台設定におけるこの中心意識の希薄さは、すでに筆者が紹介したフィレンツェのほぼ同時代の作家 Grazzini の『晚餐』の舞台のフィレンツェとトスカーナへの一点集中ぶり²⁾と好対照をなしている。外人の作者によって主に外地の出来事が語られているという点に、この時代のヴェネツィア文化の特性が現れていると言えるだろう。なお語り手のなかにアレツォ出身の Pietro Aretino とパドヴァ出身の Speron Speroni という当代の2大才人が混じっていることも、この作品の大きな特長で、市外から優れたものや興味深いものをどんどん取り込んで行くというヴェネツィア文化の特質を反映しているのである。

次に例のごとく主要な登場人物の階層を眺めておくと、以下のとおりである。(Nは貴族、Pは民衆、Rは聖職者の階層に属する。)

- I. Nのみ I、X、XI、XII、XVIの5話 (29.4%)
- II. Pのみ Vの1話 (5.9%)
- III. N+P II、IV、VI、VII、VIII、IX、XIII、XIV、XV、XVIIの10話 (58.8%)
- IV. R+P IIIの1話 (5.9%)

すでに何度も記したとおり、都市貴族と民衆との区別は決して厳密なものではあり得ないし、また主要な登場人物の判定もかなり恣意的なものであることをあらかじめ断っておかなければならないが、それにしても貴族がらみのノヴェッラがIおよびIIIと合計88.2%と圧倒的多数を占めて、民衆関連のIIとIIIの和64.7%よりも比重が高いことと、聖職者関連のノヴェッラが極めて少ないことは、やはり十分注目に値する事実ではないだろうか。たとえばほぼ同時代に書かれたと考えることが出来る Grazzini の『晚餐』においては、貴族関連が45.4%に対して、民衆関連が77.2%、聖職者関連が27.2%となっていて³⁾、伝統的な他のノヴェッラ集に近い。一見モチーフ等に関してはオリジナリティに乏しいという印象が強いこの作者 Parabosco ではあるが、やはりそのノヴェッラ集には何か新しい事態が生じていることを認めざるを得ないのである。特に聖職者が登場しなくなっていることが、彼らへの無関心の現れだと考えては誤解が生じるであろう。G.Lebatteux はこの作者と Giraldi Cinthio との作品の内に「悪戯の危機」を見出している⁴⁾が、この作品における登場人物の階層の比率に認められる特異性は、そうしたイタリア・ノヴェッラ全体の変化、否むしろ反動宗教改革を迎えつつあったイタリア文化全体の変化と関連していると、見なさねばならないであろう。聖職者の黙殺ではなくて、暗黙の了解に基づく沈黙を認めるべきだろう。「悪戯の危機」等の問題は、Erizzo と Giraldi Cinthio を扱う次稿においてさらに詳細に論じたい。

注

第一章

- 1) Enrico Malato, *La Nascita Della Novella ecc.*, in "La Novella Italiana, Atti del Convegno di Caprarola 19-24 settembre 1988", T.I, Roma 1989, p.40.
- 2) Id., p.41.
- 3) 伝記は、B.Porcelli, *La novella del Cinquecento*, Roma-Bari 1979, pp.17-8の年表、Enc. It., Vol. XXVI, Roma 1949, p.269およびDiz. Let. Bompiani, Autori, Vol. III, p.74による。
- 4) NOVELLIERI MINORI DEL CINQUECENTO. G.Parabosco-S.Erizzo, a cura di G.Gigli e F.Nicolini, Bari 1912所収のI Diporti di Messer Girolamo Parabosco がそのテキスト。
- 5) Erizzo の作品は A cura di R.Bragantini, Roma 1977 の校訂版がある。
- 6) *Delle Novelle Italiane in Prosa Bibliografia* di Bartolomeo Gamba, Firenze 1835, pp.149-151 による。
- 7) Enc. It., Vol. XXXII, Roma 1949, p.818. 前注の書によると16世紀に11版以上刊行。
- 8) Id. Vol. XIV, p.237.
- 9) D.C.L.I., V. II, Torino 1986, p.392
- 10) 拙稿、紙の上の宮廷、『イタリア学会誌』XL(pp.44-69)、東京 1990, pp.61-62参照。

第二章

- 1) 同前、p.44参照。
- 2) 前注、pp.47-8およびpp.65-6参照。
- 3) 拙稿、ジョヴァンニ・セルカンビ(Giovanni Sercambi)の『イル ノヴッリエーレ(短編集)』について、『世界口承文芸研究』第3号(pp.707-803)、大阪 1982、および同、ボローニャのノヴェッラ集『レ・ポレッターネ(Le Porretane)』の輪郭と要約、『世界口承文芸研究』第9号(pp.667-729)、大阪 1987、参照。
- 4) 前章注4) のテキストのp.5より引用。以下同テキストによる。
- 5) Id., p.11.
- 6) Id., p.16.
- 7) Id., p.165.
- 8) 拙稿、ボッジョ・ブラッチョリーニの『冗談集(Facezie)』の輪郭および各作品の要約、『世界口承文芸研究』第8号(pp.399-445)、大阪 1986参照。
- 9) 注4) p.199.より。

第三章

- 1) 前章注3) のセルカンビ論のpp.717-9. 参照。
- 2) 拙稿、Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca の『晩餐』の輪郭、『大阪外国語大学論集』第4号(1990)、pp.223-4. 参照。
- 3) Id., pp.226-8.
- 4) G.Lebatteux, *La crise de la beffa dans les Diporti et Ecatommiti*, in "FORMES ET SIGNIFICATIONS DE LA «BEFFA» DANS LA LITTÉRATURE ITALIENNE DE LA RENAISSANCE", Paris 1972, pp.179-201. (本文おわり)

付 録

第一日第一話、語り手 messer Lorenzo Contarino

近年ピアチェンツァに Carlo de' Viustini という貴族の若者がいて、Lodovica という若く美しい貴族の未亡人とひそかに愛し合っていた。Carlo が Fioretta という娘の手袋を拾ったことからその娘に恋し、Lodovica と会うことを止める。若者は娘の心が得られず、狂気に近い状態になる。未亡人は使いをやって彼を招く。ある晩男が元の恋人の屋敷を訪ねると、女は Carlo に自分は彼に奉仕し続けるつもりだから、悩みを打ち明けるように勧める。Carlo が、苦しい心境を語ると、Lodovica は相手に安心させてつれない恋人の名を尋ねる。男はその言葉を真に受けて Fioretta の名前を打ち明ける。女は男を送り出した後、ベッドに身を投げ出して泣き、復讐を企てる。Fioretta の母が自分と血縁関係にあったので、母娘を市外の庭園に誘い出し、憎い Fioretta に毒入りのリンゴを食べさせる。Fioretta は帰宅した後急死する。Fioretta が死の直前 Lodovica と市外で遊んだことを聞いた Carlo は真相を見抜き、服用後 4～5 時間は生存できる毒薬を飲んだ後 Lodovica を訪れ、人払いさせてから自分は寝台に座り、女を前に座らせて真相を問い詰めるが、相手は何も言わない。男は「何も言わなくとも、真相はその顔によって示されている。あなたが彼女の死の原因だと信じている。あなたは私を失うことによって、私と同じ苦しみを味わうべきだ」と言いながら死んで行った。

第一日第二話、語り手 il signor Ercole Bentivoglio

スペインの Valenza 滞在中のシエナ出身の二人の若者 Lucio と Alessio は、同郷で商売も同じだったため仲が良く、二人ともその土地の貴族の夫人に恋していた。二人の夫人同士はとても親しかったが、若者は相手から無視され恋に達者な Lucio も手が出せなかった。ある日雨宿りに Santa Monaca 教会に駆け込んだ Lucio は、女中と二人きりでいる恋人に出会う。女中が席を外したので、Lucio は Isabella に思いを打ち明ける。夫人も Lucio の愛は本物だと悟って、その好意を受け入れることにした。Lucio は友人のことも思い出して、夫人に友人が彼女の女友達に恋していることを話す。夫人は翌晩の 2 時に Alessio と共に自分の屋敷を訪れて来れば、必ず扉を開けようと約束する。Lucio と Alessio がその時刻に訪問すると、Isabella は一人で彼らを待っていて、「私の夫は市外には出ませんし、今は宮廷に出入りもしません。今日は召使たちが皆狩りに出掛けて留守ですので、私も Lucio と一緒に出掛けます。Alessio には私の代わりに、私のベッドで寝てもらいます。夫は隣に人の気配さえあれば安心して寝ていて、夜が明けるまで地震があっても起きて来ません。私の代役を果たして下さったら、大事な人に逢わせてあげます」と言うなり、上着を脱がせて下着姿にした Alessio を自分のベッドに潜り込ませ、Lucio と一緒に出発してしまう。残された Alessio は恐怖でろくに息も出来ないまま二人の帰りを待ち続ける。

恐怖の内に夜が明け部屋が明るくなる。Alessio はもう駄目だと観念してカーテンの隙間から外を覗くと、Lucio と Isabella が大っぴらに抱き合って近付いて来たので、自分は夢を見ているのだと思いこんでいると、いきなり部屋に入って来た Lucio がカーテンを開け、Isabella が夫の掛布団をめくる。するとその中からは彼女の夫ではなくて、Alessio が恋している貴婦人が現れたので、Alessio は喜びと驚きとで口も利けないまま、彼女の首にかじりついてしまった。Isabella は、二人の夫たちが宮廷に参上したので、そのチャンスを活用したのだと白状した。その後も彼らは夫が宮廷に居ようと帰宅してしようと、大いに恋を楽しんだ。

第一日第三話 語り手 Pietro Aretino

アレツォに maestro Stefano という片足が木の義足であるドメニコ教団所属の修道士がいたが、38才の美男子で臆面もなく雄弁だったので、信者を騙して教会の財産を殖やしていた。マントヴァ出身だが、アレツォ市民だと思われている悪人 Stefano は、Girolamo de' Brendali という若者の妻で、美人で品行の優れた Emilia に惚れこみ、毎日その夫婦の家を訪れ、最低年に2回は彼女の告解を行っていた。思いを晴らそうと機会を待つ内に、毎年彼女の告解を行うカーニヴァルの季節がやって来た。カーニヴァルから8日目に Emilia が教会に来ると、Stefano は説教の後彼女を修道院の奥の隠れた場所に連れて行き、その告白を聞き、特に色欲の罪に関して執拗に詮索して難癖を付け、「自分の貞節を守るために他人を憔悴させ死なせるのは貞節ではない」と言う。夫人はそんな人はいないと反論すると、修道士が自分の気持ちを打ち明けたので、夫人は不快を表し信じられないと言い残して帰宅し夫に告げた。夫はそれを聞いて不愉快になり、修道士相手の悪戯を企てた。妻は女中を通して修道士につまらない贈り物を贈り、修道士を喜ばせる。修道士が返礼して、それが繰り返された後に、修道士はラザロ（祝日は12月17日）の日曜日の前日に決着をつけようと夫人の家を訪問、夫は留守で夫人がもしその晩5～6時に訪ねて来れば、夫が留守なので門の扉を開けると約束した。Emilia が夫に準備が出来たことを告げる。香水を振りかけた修道士が訪問すると、夫人は早速彼を寝室に案内して服を脱がせ、下着姿にならせた後、用事を済ませると言って接吻一つ許さず部屋から出て行く。その時夫と友人が門を叩いて「開けろ」と叫ぶ。夫人は慌てた振りをして、修道士を下着姿のままで金庫の中に押し込める。夫と友人は市外で兵隊に襲われたので引き返し、市の門番を買収して帰宅したのだと述べる。友人を別室に寝かせた後、夫婦は修道士の入った金庫の部屋で一晩中楽しむ。翌朝夫と友人は、田舎から呼び寄せた二人の男に金庫を担がせ、修道士が説教する予定の教会の聴衆の真ん中に運びこませた。二人は修道士の注文で運んで来たと言明して、金庫を放置した。聴衆が待ちくたびれた時、一人の若者が「説教師を待ちくたびれたから、彼が運び込ませたこの金庫を開けてみましょう」と言って金庫を開くと、中から下着姿の修道士が現れた。しかし修道士もさるもの、4日間墓の中にいてキリストの力で蘇ったラザロの姿を示すためにそんな姿で金庫に入ったのだ

と説明したので聴衆は納得し、Girolamo と友人も感心した。彼らは最後に Stefano が「他人の妻を盗む勿れ」と説教するのを聞いて大笑いした。Girolamo はそれ以上は Stefano をいじめなかったが、その後はその類の連中の出入りを許さなかった。

第一日目第四話 語り手 messer Benedetto Cornaro

近年のトレヴィーゾに、仮名が Benedetto という高貴な若者がいた。パリで学位を取って来た老外科医の若くて美しい妻 Lucietta に恋したが、夫人も若者の気持ちを悟り、夫には治療できない欲求不満をこの若者に治療させることにした。抜目ないので Arguzia（機転利く子）と主人から呼ばれている女中を通して、夫が留守の日に男を自宅に招く。若者が指定どおり夜の22時に裏口から Lucietta の家に忍び込むと、歓迎されて深い仲になる。数カ月後男が忍び込んでいるところへ夫が突然帰宅。Lucietta は恋人を衣類や薬品類を収めている夫の金庫に隠す。知人の貴族が重症を負ったので、その手当のためにヴェネツィアに急いで行く必要が生じた医師は、薬品類を入れた金庫を船に積ませて直ちに出発したため、夫人は驚き、金庫の中にいる Benedetto も慌てる。ヴェネツィアでは泥棒たちが、医師が夫人に運ばせて貴族の家の門近くの小広場に放置していた金庫に目を付け、医師が貴族の家に入った隙に運び去る。Benedetto は泥棒たちが、「こいつの喉を掻き切ってやる（金庫をあける、の意）か」、「はらわた（中身）を引っ張り出そう」等と隠語でしゃべっているのを金庫の中で聞き、医師が自分を殺させるつもりだと観念した。そこで泥棒が金庫をぶち破った途端、「命だけは助けてくれ」と叫びながら飛び出した。泥棒たちは百鬼夜行が現れたかと思い散り散りに逃走し、Benedetto は闇の中をさまよった揚げ句、その晩愛人に振られていた美人で気の良い娼婦の住まいに逃げ込み、女に金庫を預ける。彼は女から事情を聞いて同情して深い仲になり、翌朝金庫の中身を娼婦への贈り物にしてトレヴィーゾへ戻る。恋人が死んだものと泣いていた Lucietta は、Benedetto の無事な姿を見て大喜びする。そこへ夫から至急衣類と薬品類を送れという指示が届く。間もなく医師が死んだので、一切が皆の知るところとなった。

第一日目第五話 語り手 messer Girolamo Molino

バルマに Valerio という女好きの若者がいた。Margherita という美人と結婚していたのに女性の尻を追い回していた。たまたま Beatrice という人妻が気に入る、召使いの女に手紙を運ばせる。Beatrice は困惑、使いの女を叱ったうえに、自分の小女を送って迷惑だと伝えたが、Valerio は構わず毎日手紙を書き送る。夫 Teodoro に知れない様片付けるため、Beatrice はある朝自分の小女と相談して、ミサに出ていた Valerio の妻 Margherita にすべてを打ち明け、Valerio を懲らしめる計画を立てて協力を求める。話を聞いて悲しんだ Margherita は提案に同

意する。その計画とは、Beatrice が Valerio の思いをかなえさせるふりをして、夫が留守の夜に Valerio を自宅に招き、自分の身代わりの Margherita と同衾させたのち、正体を現した Margherita の口から夫を叱責させるというものだった。計画を進めると、Valerio は大満足で Beatrice 訪問の手筈を決め、Margherita も Beatrice の身代わりになるため準備を整える。実行の日に市中で自宅の少女が Valerio と打ち合わせしているのを Teodoro が目撃、相手が名だたる好色男なので怪しく思って帰宅し、妻に激しく問い詰めると、Beatrice も一切を打ち明けた。それを聞いた Teodoro は予定を変更して自宅にこもり、妻に予定通り計画を実行させる。何も知らぬ Margherita が暗い寝室で夫の闖入を待っていると、Teodoro は少女に命じて Valerio を別室に引き留めて置き、自分が彼女のベッドに忍び込む。マイオ〔5月1日の花祭りの日に若者が好きな女の戸口に置く花の咲いた小枝〕の様子から相手が夫ではないと気付いた Margherita が「わたしは裏切られた」と叫ぶと、聞き覚えのある妻の声に Valerio は寝室に駆けつけるが、鎖帷子に身を固め抜き身の剣を掲げた Teodoro が現れて、「君が私にしようとしたことを、私が君に対してしただけだ」と言い、「この程度で済んだことを私に感謝しろ」と Valerio を罵った揚げ句、Margherita には夫を懲らしめる以外に何の悪意もなかったと彼女を弁護した後、夫婦を外へ追い出してしまう。噂はパルマ中に広まり、Valerio は、恥ずかしくて人前に出ることもできなくなった。

第一日第六話 語り手 conte Vinciguerra (何故か序文にこの名前はない)

ジェノヴァに Nicolo degli Adorni という貴族がいて、彼には Lucrezia という美しい夫人がいたが、ボローニャ出身の Gualtierio dalla Volta という若者がこの貴婦人を恋した。一時は拒絶したがやがて夫人も若者が気に入り、夫が農場管理人の娘に惚れて度々市外に出掛けるので、その隙に若者と会おうと計画。夫が4～5日分の食糧を用意しているのを見て、その夜24時に訪問すれば中へ入れてやろうと連絡した。ところが夫は市から2マイルの地点で、管理人の娘に与えるために買っておいた土産の袋を忘れて来たのに気付いて自宅に取りに戻った。一方 Gualtierio は、Nicolo の弟に見えるように赤い服を着てやって来たため、屋敷の前で抜き身の剣を持って待ち伏せていた Nicolo の敵たち4人に襲撃され、腕に軽い傷を受けて苦戦する。ちょうどそこに帰って来た Nicolo は、Gualtierio を弟だと思って加勢し4人を追い払う。助けた若者は赤の他人だったが、軽い怪我をしていたのではおけず、粗野な貴族としては珍しく親切に、自宅に招き入れて妻に怪我の手当てをさせ、その夜は泊めてやる。その翌朝主人は若者に気が済むまで滞在せよと言い、親切にもてなすように妻に命じておいて、愛人のところへ出発した。青年は大した傷ではなかったので、奥方と若者とは夫がお膳立してくれた御馳走をたっぷりと味わった。元来ジェノヴァには客と奥方が親しく付き合う習慣があるので、その後も怪しまれる事なく二人は末長く楽しんだ。

第一日第七話 語り手 messer Marcantonio Cornaro

パドヴァに Corradino という貴族がいたが、軽率な性格のため Leggiero [軽夫] と呼ばれていた。彼にはずる賢くて陽気な mona Betta という妻がいたが、彼女は Federico da Turino という留学生が気に入って色目を使う。当初学生は若い娘に夢中だったので、夫人は夫の留守に夫の召使い Spinardo に協力を求め、Spinardo が進んで協力を約束し、夫人もたっぴり布地類を与えた。Spinardo はボローニャで Federico と親しくなっていたので早速女主人の気持ちを伝え、若い女に腹を立てていた Federico は貴婦人に興味を抱き、翌日の 9 時に mona Coscienza の売春宿で逢うことになる。ところが夫の Corradino も度々その宿の女主人が紹介する若い女を買っていたので、mona Betta が恋人の到着を待っているところへ、夫がノックして入って来て、2 人は鉢合わせしてしまう。一瞬 2 人は驚いて絶句するが、さすがに女性なので（原文のママ）より大胆不敵で恥知らずな夫人は、「どうしてこの時間にこんな所にいるの」と早速尋問に取り掛かり、夫が「お前こそ」と問い返すと、「よくも私を裏切ってくれたわね」と喚き立てて圧倒してしまう。その場に Federico が入って来たので、更に大声を張り上げて、「私の従弟が昨日レヴァンテからパドヴァに帰って来たので、あなたの悪事の証人になってもらうために、今ここに来てもらったの」と Federico を自分の従弟に仕立てて夫に紹介した後、おいおいと泣き出す。Federico はすぐ事情を飲み込み、早速夫に小言を言う。夫人は Federico の腕をつかみ、「従弟よ、中に入って私の苦勞を聞いて下さい」と個室に引き入れ、夫を外へ押し出してしまふ。夫は訳が分からないまま、妻にレヴァンテ在住の従弟がいたことを思い出し、嵐から脱出できたのでやれやれと思いながら、その売春宿から立ち去る。その日夫人は偽の従弟と共にたっぴり楽しみ、以後も怪しまれることなく交際を続けた。

第一日第八話 語り手 messer Alessandro Colombo da Piacenza

かつてブレッシャに Tomaso de' Tomasi という古い貴族の息子がいたが、両親を失って莫大な遺産を受け継いだ。放蕩を覚えて悪い連中のカモとなり、四年間で財産を蕩尽し、残るは市からごく近い Tomaso ひとり養うのも難しい小さな農園だけになる。彼は前非を恥じてブレッシャから去ろうと考え、その資金作りに残された小さな家と農園を売りに出すが、恥ずかしいので取り引きを秘密にするよう買い手に頼んで 7～8 人の貴族と契約を結び、皆から手付金を受け取って大金を手に入れた。しかし企みは露見して、買い手たちに訴えられ投獄される。Tomaso はかつて大の親友で、儲けさせてやった公証人に使いをやり、牢獄へ来るよう頼む。公証人が波々やって来ると、Tomaso は狂人の振りをするので証人になってくれと頼む。うまく行けば 25 ドゥカート（謝礼）を払うと聞いて、公証人は証人役を引き受けた。裁判の日公証人は、ポデスタに Tomaso が狂人で受け取った金を全部運河などに捨ててしまったから、裁判をしても無意味だと

証言した。その結果 Tomaso は一文も払わずに無事釈放される。その後間もなく公証人が約束の25ドゥカートを求めると Tomaso は狂人の振りをして鏝一文払おうとはせず、公証人も自業自得だったことを悟って諦めた。

第一日目第九話 語り手 messer Bartolomeo Vitturi

かつてレッジョに戦争のため Giuvenale というピエモンテ貴族が、夫人同伴でやって来た。この男は夫人がまだ若く本人は50才近い老人だったくせに、自惚れ屋で自分はすごい美男子だと錯覚していて、あらゆる機会に色事に勤しんでいた。この町で出会った狡猾な娼婦が気に入り、お金や品物を贈る。女は Giuvenale の愚鈍さを見抜いて金品を絞り取り、彼の言いなりにならないで焦らす。Giuvenale には Scaltro [狡猾な] という召使がいて、女の魂胆を見抜いて主人に忠告するが、効果がないので自分もうまい汁を吸おうと企む。Scaltro は以前 Nebbia [霧] という魔術師を信用して金を払ったが、何の役にも立たず言い訳をするばかりなのでペテン師だと見抜き、彼を利用しようとする。そこで Nebbia に主人を騙してくれば利益を山分けしようとして誘って悪戯の仲間引き込む。Nebbia は頭蓋骨や古い棺桶などを用意し、少女と共に魔術の準備をして、翌日 Giuvenale を騙す手筈を整える。Scaltro は主人に4スクード出せば、娼婦の気持ちを捕える魔術をかけてもらえると説得した。その翌日の夜主人から前金2スクードを受け取った Scaltro は、主人に今度開けた時にはそばに例の娼婦がいるからすぐに飛び付けと助言した後、主人を Nebbia の頭蓋骨入りの棺桶に入らせて、それを土に埋めて蓋を閉じる。Nebbia にマント等の衣類を脱がせ自分がそれを着て彼に変装した後、Nebbia に女装させて棺桶の所へ連れて行く。Nebbia が棺桶の蓋を取ると中から Giuvenale が飛び出し、恋人の娼婦だと信じて Nebbia に抱きついたため、Nebbia は悲鳴を挙げてもがく。Scaltro は大笑いする。やがて Scaltro が手配した4人の男たちが Nebbia を担いで遠くまで運んだ後放してやる。Giuvenale はそれを見て悪魔が恋人を連れ去ったものと信じこみ、脅えて逃げ出す。その間に Nebbia の服を着た Scaltro は彼の家を訪問、魔術師の美しい妻が扉を開けると、階段も上らないで無言のまま彼女の「四月のイチジク」を摘み取り、ものも言わずに立ち去る。そこへ女装した夫がほうほうの態で帰宅する。妻から、先程夫の服装でやって来て、急いで彼女と楽しんで行ったのは誰だったのかと尋ねられた Nebbia は、かつてカモにした相手に騙されたことを悟って落胆し倒れてしまう。さらに後で町の人に後ろ指を指されて嘲笑されることを恐れて、彼は妻を連れて早々にレッジョから立ち去った。

第二日目第十(通算)話 語り手 Messer Feberico Badovaro

すでに昔のこと、名声高いモンフェッラート侯 Lodovico (実在せず) には子供がなかったの

で神に祈ると女の子が生まれ、Briseida と名付けられて美しい娘に成長した。彼女を何度も見たサルッツォ侯の息子 Gasparo は彼女に恋し、身分違いのため結婚が許されないのを知りながら、従者の Rinconetto に相談した。従者は危険だと止めたが Gasparo があきらめないで、ローマへ向かう飛脚に化けフランス皇太子の姫君から Briseida あての手紙をもって来たと偽って、姫君の召使に Gasparo の手紙を届けさせた。Gasparo の様子からその気持ちを知っていた Briseida は、手紙に心を動かされて返事を書き、Monica という老女の召使に秘密を打ち明ける。Monica は懸命に制止したが、Briseida が自殺すると脅すので、やむなく連絡役を引き受け、Gasparo に翌日の5時に市の西側の城壁に来れば、姫が自ら小さな門を開けて中に入れるという約束を伝える。Gasparo も従者を通じて訪問を約束し、2人は密会して、翌晩も会う約束をして別れた。だが翌晩 Gasparo がそこへやって来ると、偶然家来たちと狩に来た侯が、彼を見付けて家来に捕らえさせ城内へ連れて行く。Briseida は門を開けに来て Gasparo が居ないので、父に気付いて逃げたのだと考える。侯は娘の名誉が傷つけられたと知り、直ちに Gasparo の首を切らせ、それを携えて娘を訪ね、「これがおまえの恥辱の源だ」といって与えた。Briseida は首を携えて小門から出、Gasparo の父の許に行き、息子の首を見せて一切を語る。サルッツォ侯は怒りの余り、Briseida をナイフで滅多切りにして殺し、両領主の間で戦が始まる。すべての希望を失ったモンフェッラート侯は、悲惨な死を遂げた。

第二日目第十一(通算)話 語り手 Speron Sperone

キプロス島の Famagosta 市の貴族の息子 Fausto が良家の娘 Artemisia に恋し、娘の両親の監視のため娘に会えないので、手紙で思いを伝えると、娘も若者に夢中になる。そこで木綿や砂糖を積んでヴェネツィアへ向かう船で駆落ちする約束をして、Fausto と男装の Artemisia が船に乗り込む。船は嵐に襲われて100人以上が死に、船自体も故障して静まった海の上で立ち往生した。そこへ海賊のフスタ船2隻が襲い掛かり、全員を捕虜にしてカンディア島に上陸、捕虜を奴隷としてトルコ流のやり方でラッパの音と共に売り払う。ある海賊が男装した Artemisia を女と気付かずに買って連れ去り、体格の良い Fausto は漕ぎ手として海賊船に残されたため、2人は別れてしまう。Artemisia の船はロードス島に着き、彼女は300フィオリノでミラノの商人に買われ、ジェノヴァに連れて行かれた。商人は彼女が男だと信じたまま美貌と気品のためミラノ公 Giovan Visconti に贈る。Fausto を乗せた海賊船は Volona (アルバニア) でシチリアのガレオット船に捕われ、トルコ人は捕縛され、キリスト教徒は全員釈放されたが、恋人を失った Fausto は祖国にも戻れず、ナポリの Carrafa 家の騎士に9カ月仕えた後フランスへと出発、ローマを経て夜中の23時にミラノに着く。ミラノで泊まった宿屋 Torre の同室に悪人が4人泊まっていた捕縛されたため、Fausto も一味として捕えられ、死刑を宣告される。Fausto はせめて死ぬ前に一言領主の前で弁明させて欲しいと訴え、許されて今までの不運を公爵の前で語る。する

とそこに居合わせて聞いていた Aretemisia が公の前に身を投げ出して大声で泣いた後、「いま若者が語ったことは真実です。私が Artemisia です。その証拠に私の胸を開かせてください」と証言し、男装していたことを告白した。数日後二人がキプロスきっての名家の出と知った公爵は、二人に結婚させて立派な贈り物を与え、ヴェネツィアまで送らせる。二人は金持ちになって帰国し、両方の家族から大歓迎され、立派な子供たちに恵まれて末長く幸せな日を過ごした。

第二日目第十二(通算)話 語り手 messer Domenico Veniero

薬のアレッサンドリアに、富裕で高貴な Giberto という若者がいた。同様に高貴で美しい娘 Cornelia に恋したが、相手が全く冷たいので絶望し、父のお金を持って出奔した。5年間各地を放浪する内に、人々は彼が死んだと信じる。恋が募るばかりなので、彼は髭を延ばしやつれ果てた姿で隠者に成り済まして帰国した。宿屋に潜伏中妊娠していた宿の主人の妻が双子を産むと予言したのが当たったため、予言者としての評判が高まり、Cornelia の耳にも入る。娘は侍女をやって Giberto を招き、自分はこの世で最も無情な若者の餌食になっている、と訴えた。Giberto がリビアで見付けた薬草で作った薬なら、冷たい相手の気持ちを靡かせるのに効くという、女はそれを分けて欲しいという。Giberto はあなたが男に夢中になるとは信じ難いと言い、相手が反論すると、薬はお金では譲れない程貴重だが、喜んで差し上げよう、その代わりにあなたの秘密を言わせていただくと、あなたはかつてある男に冷たく当たったため、今その罰であなたは冷たい男を愛さねばならないのだと告げる。娘は男に冷たかったのは貞潔のためだと弁解した。Giberto は娘の非情さを非難し、彼女自身自分が男に冷たい事を認めたものの、全然反省しない。Giberto は薬をあげるから、思う男の気持ちをつかみなさい、と忠告した。Cornelia は3年前に自分に恋した男が死んだという知らせを受けたが、もし彼が生きていたとしても、決して彼を愛しはしないだろうと断言した。男はその言葉に絶望したものの、何食わぬ顔で2時間後に侍女に宿屋まで薬を取りに越させるならば、それを差し上げようと約束し、彼女が先に半分飲み、恋する相手に残りを飲ませれば、その効果で相手の心が掴むことができると告げた。女と別れた後 Giberto はその非情さを罵り、彼女に毒を飲ませて自分も死のうと決心した。直ちに薬屋へ行き、フランスにいる薬屋の親友に送りたいので、最高の毒薬を売って欲しいと頼む。薬屋は彼の意図を見抜き、偽って眠り薬を与える。Giberto が効き目を知りたがると、薬屋は子犬に少量飲ませ、すぐに子犬が眠ったので、Giberto は毒薬の効果に安心して宿に戻り、取りに来た侍女にそれを与えた。言われたとおりに娘がそれを飲むと、すぐに死んだように倒れたので大騒ぎになる。娘の父親が侍女を取り調べ、隠者が原因だと知って知事に訴えた結果、Giberto は裁判にかけられ、すべてを白状した。証人として呼び出された薬屋が、それは毒薬ではなくて眠り薬だから酔を飲ませれば娘は目を覚ますと証言。一同が娘の家へ行ってみると、娘は目を覚ます。人々は Giberto が戻って来たので大喜びし、知事は Giberto に監獄を出て Cornelia と結婚すべ

しという判決を下した。結婚した二人はやがて愛し合い、多くの子供を得て平和に暮らした。

第二日目第十三(通算)話 語り手 messer Daniel Barbaro

ナポリで貴族の党派が支配して争いが激化していたころ、妻をなくして3才の男子と2才の女子を持つ貴族 Manfredi が党争に嫌気がさして、財産の管理を代理人に任せ、子供たちとヴェネツィアに移住するため、お金や宝石を持って船に乗り込む。途中で嵐に襲われ、あわてた Manfredi が船頭の勧めのままボートに移り移って、子供と生き別れになる。Manfredi は宝石を売ってヴェネツィアに住みつき、子供のことを気にしつつ年を重ねる。18年後相続人になる筈の甥の行状が悪いので人々の勧めでヴェネツィアの富裕な市民 Marco Serafino の娘 Laura との結婚を決意した。Laura はコンスタンティノープルから来た Costantino という恋人に夢中で、二人で駆落ちしようと相談。下男がこれを聞き主人に密告、怒った Marco は市の警吏に頼んで Laura を連れ出しに来た時 Costantino を捕えようと待ち構える。Marco の家にはコンスタンティノープルで買って来た奴隷がいたが、この奴隷が主人の計画を知って恋人たちに深く同情し、Manfredi を訪ねて事情を訴えた。それを聞いて奴隷に興味を抱いた Manfredi が身の上を尋ねると、相手は実は自分は女で、兄と共に難破船でコンスタンティノープルに流れついて奴隷として売られ、女性であるにもかかわらず常に男装していることを語る。Manfredi は年格好から自分の娘ではないかと思ひ右の肩を開かせると、生まれ付きの黒い痣が見つかる。再会を喜んだ Manfredi は、Marco と警備隊長の一団が Costantino を捕えたところへ現れ、2 人を助け出して Costantino の身の上を聞くと、彼も昔別れた息子で、キリスト教徒の主人が遺言で彼を自由の身とした上、多くの財産を残してくれたことがわかる。Manfredi は再会を喜び、息子を Laura と結婚させて、一緒に幸せな日々を送った。

第二日目第十四(通算)話 語り手 Messer Fortunio Spira da Viterbo

今と気風の異なる昔、ボローニャの家柄も良く富裕な若者 Faustino が Eugenia という娘に恋した。家柄と富とが釣り合わず、Faustino が娘と結婚するはずはないと考えた娘の両親は、2 人を会わせない。信心深い娘の母親は毎朝娘と近くの教会の早朝のミサに出かける。このことを知った若者は母親に警戒されないように変装して教会に参り、娘の姿を見ることにする。messer Nastagio de' Rodiotti というボローニャ出身の信心深い商人が一日の高利貸の仕事の前には必ずミサに出ることにしているので、同じ早朝のミサに通う。Nastagio は熱心な信者なので、いつも祭壇のすぐそばに陣取り、その席がちょうど Faustino が Eugenia を見つめるのを遮る位置に当たっていた。若者は一計を案じ、その教会の監督に当たっている神父の所へ行き、「キリスト教に改宗したユダヤ人がいて熱心にミサに出ています。彼はとても貧乏で生活に困っ

ていますので、みんなから施しを集めるべきです」と勧告し、Nastagioこそその感心なユダヤ人だと教えた。昔の事なのでお人よしの神父は次の日曜日の最初のミサの時、Nastagioのことを貧乏で感心な改宗したユダヤ人だと皆に紹介し、施しを勧めた。Faustinoが真っ先にNastagioの許に近付き「恥ずかしがらずに受け取りなさい」と言って施しを行うと、感激した信者らが次々と集まり、有無を言わずお金を施す。神父は後で誤りに気付いて謝ったが、この朝Nastagioは改宗したユダヤ人として皆に紹介されてしまった。その結果Nastagioはその教会には二度と来なくなり、恋人たちの邪魔が除かれた。

第二日目第十五(通算)話 語り手 Messer Alvigi Zorzi

死ぬ前に少し他人の娘に持参金を贈ることで天国へ行けると信じている人がいるが、ヴェネツィアにもそういう高利貸がいて、Trivigianaの田舎の村の自分の農場管理人の未亡人の娘に25フィオリノの持参金を残して死んだ。娘のPolissenaに適当な婿が決まったので、母と娘は花婿の要望で高利貸の兄弟(死んだ高利貸しと違い親切な金持ちの貴族)の所へ遺言の持参金を受け取りに行く。結婚したという証拠を示すため、ヴェネツィアへ行く途中で出会った若者に、花婿の代わりに同行するように頼む。その若者Menicoを伴った母娘が貴族の屋敷を訪れると、お金が手許になく明日は必ず用意するので泊まって行くようにと勧められる。美人のPolissenaが気に入ったMenicoは、貴族に「私たちが結婚していることで閣下に疑問の余地が残らないよう、今夜彼女と同室で寝かせて下さい」と頼んだので、貴族は面白がって地下室の寝室に二人を泊めてやる。Menicoは母親の心配を無視して、その夜娘と関係を結び、家が近いことも分かって、田舎に戻ってから彼女の家に遊びに来るよう誘われる仲となる。こうして母娘は持参金を得て帰郷した。

第二日目第十六(通算)話 語り手 messer Giambattista Susio dalla Mirandola

近年モデナの貴族の若者 messer Olderico が軽い裁判沙汰を逃れてパルマに移住し messer Alberto degli Albertuzzi の若くて美しい妻との交際を望んでいたが、夫が嫉妬深いため近付けない。Albertoの家の門が、隠されたひもを引っ張れば開くことに気付いた若者は、モデナ人の友人Troianoに頼み、相棒と二人で武器に身を固め、自分が丸腰でAlbertoの邸宅の前を通り掛かった時に襲うよう依頼した。予定通り二人に襲われたOldericoは、ひもを引いて門の中に逃げ込む。窓から騒ぎを見たAlbertoは、逃げ込んで来た若者に何の疑いもなく同情して、青年に敵がいると聞くとその晩泊まっていくようにと勧めた。その後Albertoが何気なく外出すると、Troianoらが待ち伏せていて「敵をかくまった悪漢だ」と叫んで襲い掛かり、彼の退路を妨げた。二人に追われたAlbertoはかなり離れた親戚の家まで走って逃げ、そこで味方を得て

彼らに護衛されてようやく帰宅した。それまで時間がたっぷりあったので、Olderico は夫人と仲良くなり、その後何度も忍び会いこの出来事を大笑いした。

第二日目第十七(通算)話 語り手 messer Anton Giacomo Corso

まだ何カ月もたたないミラノの出来事。ある立派な家庭の未亡人が、Camilla という16才の單純な娘と暮らしていた。田舎の別荘へ貴族の女たちと遊山に出掛け、泉で水浴びしたところ、ザリガニが Camilla の体内に入り込み、つまみ出そうとすると、ますます奥に潜り込んでしまう。Camilla は怖くて泣き叫ぶ。たまたま別の別荘に来ていた彼女の名付け親の医師が名案を考え出し、Bertoldo という容姿端麗な村の若者が招かれて、治療に協力させられる。Bertoldo は気が進まなかったが、結局未亡人から手ほどきされて協力し、見事ザリガニを釣り上げた。未亡人は満足したが、娘の方はその後体の中に小さなザリガニが一杯いるようだと言って、治療の必要を訴え始める。賢い未亡人は「穴のザリガニを釣ってくれる人を見付けて上げますよ」と言って、若くて美男子の夫を見付けてやり、娘の心の平和が回復された。ここから欲求不満の人に「おまえは穴の中をザリガニが匍んでいるような気持ちがしているにちがいない」という motto (言い回し) が生まれた、という。(付録おわり)

(本研究は平成三年度文部省科学研究費一般研究(c)による研究の一部である。)

(1991. 4. 27 受理)